



臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために Vol.9 2001 秋冬号 

特集：対話は終わらない 哲学プラクティスとソクラテック・ダイアローグ
Vol.9 Autumn/Winter 2001 大阪大学文学研究科臨床哲学研究室

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために

Vol.9 2001 秋冬号

特集 対話は終わらない

——哲学プラクティスとソクラティック・ダイアローグ——

特集1 哲学をいかに開業するか?——第6回哲学プラクティス国際会議・オスロ報告

対話は終わらない	本間直樹	4
「魂のための医療」——フィアリーによる、がん患者との哲学カウンセリング	会沢久仁子	11
オスロの街の哲学者たち	寺田俊郎	17
「子どもとともにする哲学」についての付記		20

特集2 ソクラテス者がやってきた、Ja, Ja, Ja!——SD週間 in大阪

論拠付け (argumentation) を指向するSD	堀江 剛	23
ソクラティック・ディレンマ・トレーニング	中岡成文	25
SD " What is a good teaching? 経過と、遡及的抽象、進行方法の検討	会沢久仁子	26
SDにおけるExampleの意味と、Example-Giveの役割	稲葉一人	30
2001年SD活動の記録		33

報告 街角でも哲学——哲学カフェ&バー @ 應典院

「他人の近さと遠さ」	三浦隆宏	35
「一枚の絵から」	高橋 綾	37

臨床哲学の余白 39

特集 1

哲学をいかに開業するか？

第6回哲学プラクティス国際会議・オスロ報告

「哲学プラクティス Philosophy in Practiceは、(いわゆるアカデミックな哲学でいう「実践哲学 practical philosophyとは異なり、) 弁護士や医者が街で開業するように、哲学者が大学や研究機関から街に出ていき、人々と様々な仕方で交わり、そこで人々の抱える問題に関わる活動一般を意味する。代表的なものとしては、プラクティスの創始者ゲルト・アーヘンバッハが行っているように、(主に自宅で)訪問者に対してカウンセリングを行うことである。しかし現在、ドイツ語の“die philosophische Praxis”から“Philosophy in Practice”として英語やその他の国の言葉に翻訳されるにしたがって、哲学プラクティスの意味と活動の幅は広がり、哲学カウンセリングのみならず、哲学カフェ、哲学ディナー、コンサルティング、子どものための哲学、ソクラティック・ダイアログなど、もともとは哲学カウンセリングとは別の流れとしてあった様々な哲学の実践の総称として考えられるようになったようだ。しかしこうした形態の多様さとは別に、基本は極めて単純である。形式が1対1、1対多、多対多であっても、あるいは対象が個人、組織、子ども、大人であっても“対話”を行うことにある。

このような(広義の)哲学プラクティスの試みは臨床哲学の活動とも関連が深い。臨床哲学のメンバーが哲学プラクティスの国際会議に出席するのも今年で3回目となり、徐々にではあるが以前よりこうした活動への理解の奥行きと広がりが増してきたように思われる。特集1では、オスロでの会議(テーマは“Philosophy in Society”)の様態をダイジェストでお伝えしたい。

対話は終わらない

本間直樹

どうやら毎年7月の終わりには、ヨーロッパを訪れ、「哲学プラクティス」や「ソクラティックダイアログ」といった「対話」関連の国際会議に顔を出すというのが、年間スケジュールとなっていました。社会の具体的な場所で・生きる人たちとともに哲学を実践することを主旨とする「哲学プラクティス」は、私たちの臨床哲学の試みと共通点が多く、今回こそ臨床哲学について発表しようと思いつきながら、準備が間に合わなかったのが何より残念だ。今年の臨床哲学関係の参加者は前回に引き続き寺田俊郎さんと私、そして今回初めての会澤久仁子さんと栗田隆子さん。

この会議への参加は、1998年ドイツ、ベルギッシュグラートバッハで開かれた第4回会議「哲学プラクティスと徳」以来、今年で3回目になる。当時私には哲学プラクティスについての予備知識がほとんどなかったうえ、“創始者”アーヘンバッハがその“お膝元”でどうしてもやりたかったというそのテーマがその当時の（そして今も？）私にとってまったくピンとこなかったこと、それに初めてのヨーロッパ体験、英独仏語の混交という条件が重なって、情けないことに私には

参加すること自体がストレスだった。（この会議の様様については、中岡成文「哲学プラクティス国際学会に参加して」『臨床哲学』創刊号1999年を参照。）

しかし1999年、オクスフォード大学で開かれた第5回会議は随分違ったものだった。テーマが“対話を通して考えること Thinking Through Dialogue ”であり、会議全体の主旨が明確に「対話」に方向付けられ、言語も英語に統一されており、またプログラムと会場が「哲学カウンセリング」、「子どものための / とともにする哲学」、「ソクラティック・ダイアログ」の3つに区分けされていたことなど、大変参加しやすかった。また内容面でも、主催者カリン・ムリス Karin Murriss の「子どものための / とともにする哲学」、ビジネスのための哲学(ディレンマ・トレーニングやソクラティック・ダイアログを含む)など、短期精神療法ブリーフセラピーと哲学カウンセリングの比較など、より実践的なテーマが多く、哲学にとって「臨床」とは何かを考えている私たちにとって、馴染みやすいものであった。いずれにせよ開催者・開催地によって内容そして参加者にかなりのヴァリエーションがあることは興味深い。このオクス

フォードでも、イギリスやオランダの参加者が多かったことが内容面にも反映されていたのかもしれない。(詳しくは『メチエ』第4号特集：哲学プラクティス参照)

次回開催地決定をめぐる顛末

さて、21世紀最初の開催地オスロ。気候は暑くもなく、寒くもなく、まさにベストコンディション。今回から会議は2年おきに開催されることになった。主催者は「オスロ・グループ」と呼ばれる人たちで、開催スタッフは十数人で決して多くない。3年前ドイツで知り合ったとき、彼ら/彼女らはプラクティスを準備している段階であったが、その後アーヘンバッハに敬意を払いつつも、オランダ経由でソクラティック・ダイアログを取り入れるなど、独自の方法論を展開し、着実に歩みを進めているようだ。なお、開催スタッフのなかには、ノルウェー出身で、現在ドイツの哲学プラクティス協会の委員でもあり、哲学プラクティス国際協会の副会長を務めるアンダース・リンドセット Anders Lindsethの姿も見られた。

会議は7月24日から27日までの4日間、オスロ郊外にあるオスロ大学教育学部の校舎にて行われた。全員が一堂に会して聴く講演が5、いくつかの部屋に分かれ同時に行われるペーパープレゼンテーション(用意した原稿を読み上げ、質疑応答を行うもの)が33、その他ワークショップなどが11。参加者は100名足らずだったが、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドの北欧か

らの参加者が多く、その他、オランダ、アメリカ合衆国、ドイツ、スイス、イギリス、イスラエル、フランス、ベルギー、ルワンダ、カナダ、ブラジル、トルコ、日本と、哲学プラクティスは各地域に着実に拡がり始めているようだ。

ところで、毎回、会議期間中に次回の開催地を決めることになっている。大変驚いたことに、会議参加者のうちにヨーロッパ以外(つまり日本で)で会議を開いてはどうかと強く主張する人たちがいて、オスログループの一人ピア・アクセル Pia Axell の自宅で開かれたレセプションで、今回の主催者ヘニング・ヘレスタッド Henning Herrestad が私に非公式にそのことを打診してきたときには戸惑ってしまった。

ソクラティック・ダイアログについては、オクスフォードでそれを体験してからすぐさま日本でも何度か試行し、いまや臨床哲学の活動にとって欠かせぬ一駒となっている。だが哲学プラクティスの柱である“カウンセリング”の方は、私たちもまだ二の足を踏んでいるのが実状だ。しかも欧米のプラクティショナーたちは大学の外で活動(開業“in practice”)しているのに対し、私たちは(まだ?)大学の中のなかにいる。いずれにせよ、哲学プラクティス(というより哲学カウンセリング)に本格的に取り組むかどうか決めあぐねている私たちにとって規模が大きくないとはいえ国際会議を大阪で開くのはどうも荷が重い。

しかし彼ら/彼女らが私たちに期待するのは分からないわけではない。日本で会議を開くことを勧めた人たちの言葉には、ヨーロッパの哲学の伝統やセラピー

文化に限界を感じ、何か違ったものをその「外」いわゆる「東洋思想」に求めるというオリエンタリズムの臭いも確かにあった。しかしそれだけではない。哲学プラクティスはまだまだ“アカデミズム”では認知されておらず、主催者のオスログループを含めて会議の参加者の多くが、大学の中に職を持っていない。国際協会からの財政的サポートも恐らくそう多くは期待できないなか、会議の主催者は毎回、大学の共催を得るのに苦労しているのだろう。そうした状況で、哲学プラクティスに関心を持って会議に3度も(!)参加し、しかも「臨床哲学」という名を冠した研究室を国立大学の哲学講座のなかにもつ私たちに、彼ら/彼女らの視線が集まるのも無理はないかもしれない。また、先ほど「オリエンタリズム」と書いたものの、アジアに位置し、アジア思想の一脈を担い、かつ紛れもなくアジア文化・風土のなかにある日本で、しかも“社会へ出ていこう”と言っている私たちが、“ソクラティック・ダイアログ”だの“哲学カフェ”だの、相変わらずヨーロッパの流行りものをいち早く取り入れようとしているのも、おかしい話なのかもしれない。

あれこれ考えているうちに会議は終わり、結局次回の開催地はイタリア、ミラノに決まって私は胸をなで下ろした。会期中、アーヘンバッハの指導のもとでドイツのベルリンとイタリアのミラノに哲学プラクティスの研究所が作られることを耳にしたが、イタリアでそれほど哲学プラクティスが受け容れているとは知らなかった。

アーヘンバッハの遅刻

さて、肝心の会議の内容について。前回と同様に、テーマはほぼ「哲学カウンセリング」、「子どものための/とともにする哲学」、「ソクラティック・ダイアログ」の3本柱に分けることができる。そのうち、ソクラティック・ダイアログについては、昨年ドイツで開かれた国際会議に参加したおかげで、随分と明確なヴィジョンをもつことができたこともあり(『メチエ』7号特集:ソクラティック・ダイアログ参照)、私は主にカウンセリング関係の発表に参加した。そのなかから私の印象に残ったいくつかの講演や発表を簡単に報告しよう。

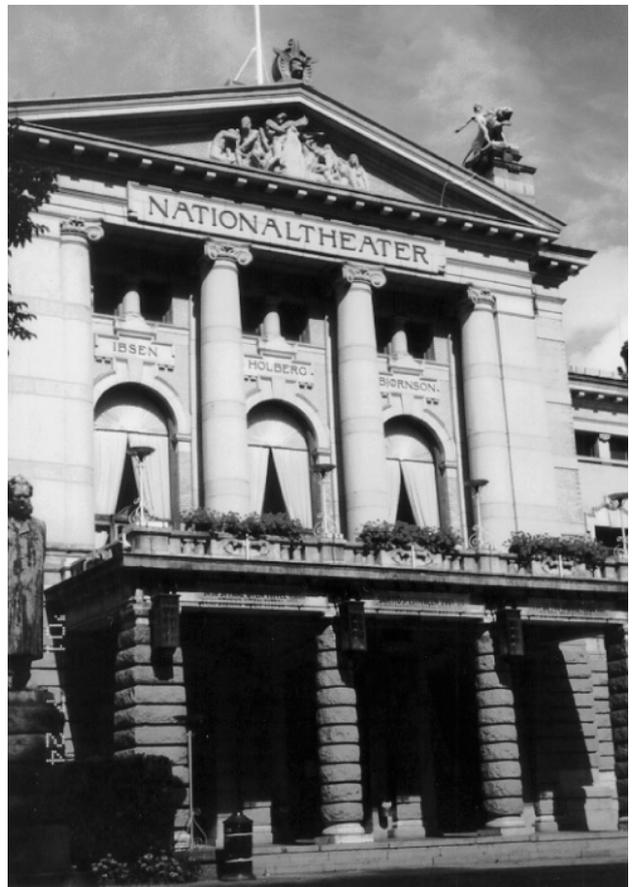
まず会議の冒頭を飾る「オープニング講演」。もともとのプログラムによれば、国際協会会長のアーヘンバッハがこの大役を務めるはずだったが、こともあろうに彼が“遅刻する”(^_^;)という不始末をしでかしたため、急遽会議最終日にトリの講演をするはずであったリンドセットが代役を務めることになった。リンドセットの講演タイトルは“Philosophical Practice: What is at stake?”。講演の要点は、哲学プラクティスをそれ以外のプラクティス(カウンセリング)から際立たせるものは何か?と問いかけ、その答えをめぐってコロキウム(討論会)を開こうというものだった。哲学プラクティス(カウンセリング)が様々な地域で様々な問題や人々に受け容れている反面、何が哲学的といえるのかについて、プラクティショナーたちのあいだで答えが共有されることがまれになったと彼は言う。しかしリンドセットは自分自

身の答えを明確に言うことを避けた。なぜなら彼はこれまでの会議で何度も実存哲学や解釈学から哲学プラクティスを基礎づける試みを発表していたからだ(詳しくは本間直樹「他者の自己表出を受けとめながら...」『臨床哲学』第2号2000年を参照)。けれども彼は答えのヒントとなる事柄をいくつか言った。彼によれば哲学プラクティスは「応用哲学 applied philosophy」にあたるという。応用というのは、なんらかの問いや問題に対して解決・解答あるいは助言を与えることであるが、その問いや問題それ自体が哲学的である必要はない。むしろ肝心なのは、哲学的な仕方である in philosophical way 答えることである。その際、必要なのは柔軟さ、偶然の出来事にうまく対応することである、と。講演の後に会場からの、あなたの言う哲学的な仕方とは具体的にはどういうことか?という質問に対し、リンドセットは、例えばカウンセリングの場面では、「あなたの問題は何ですか」と尋ねるのではなく、他者の生の語調 tone から対話への要求を聴き取ることが大切なのだと答えた。

「応用哲学」に向こうを張って「臨床哲学」を提唱する私たちにとって、「応用」を肯定的に語るリンドセットの言葉は驚きだった。しかしよく考えてみれば、ガーダマーの解釈学をベースとするリンドセットが、解釈の実践が具体的状況への適用においてなされると主張することは何の不思議もないことだ。それよりも、まさに臨床哲学研究室の(ケアや教育その他についての)日々の議論のなかでも「柔軟さと偶然性への対応」ということが重要な意味をもっているというこ

とを改めて気づかされた。

その後、昼食時間に私はリンドセットと話す機会があった。私は彼の講演のいくつか(彼は解釈学とナラティブセラピーに言及している)を日本語に翻訳したいと告げ、彼は喜んで許可してくれた。余談になるが、彼が「今回はプロフェッサー中岡は来っていないのか」と尋ね、「彼のドイツ語は恐るべきものだ。私などはというていかなわぬ」と言っていたのが可笑しかった。また私はリンドセットと話す前に、オクスフォードの会議で知り合ったトルコのプラクティショナー、ハルーン Harun Resit Sungurlu* と話していたのだが、彼に、「哲学カウンセリングをどうやっていいのかわからない」と言ったところ、「やってみせるから、何かおまえの生活のなかの問題を言ってみろ」と彼に言われ、私はすぐさま答えられず困惑した。後でそのことを



オスロの国立劇場

リンドセットに話し、先のリンドセットの質疑応答が大変興味深かったと彼に言う。彼は苦笑していた。(* 会議では皆ファーストネームで呼び合うので、ファミリーネームの発音がよく分からない。)

哲学と精神療法

哲学プラクティス(カウンセリング)は、精神療法(psychotherapy)としばしば対比される。方法的、政治的など様々な理由から哲学プラクティショナーは精神療法を敵視する傾向にあるが、中でもエミー・ヴァン・ダーゼン Emmy van Deurzen はイギリスの精神療法界の中心人物の一人でありながら、哲学プラクティショナーからも尊敬されている存在だ。彼女は二日目の講演で、哲学からの深い影響を受けた精神療法として実存精神療法をあげ、キルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ビンズワンガー、ブランケンブルクらのテキストを巧みに引用しながら、「人間理解」のために哲学と精神療法がともに手を取り合う道を示した。哲学者の言葉を次々と画面に映し出しつつ、実存精神療法の理論を手際よく体系的にまとめる彼女のプレゼンテーションは実に見事なもので、多くの聴衆は魅了されたようだ。しかし(カウンセリングの実際はともかく少なくとも理論的には)「人間」「精神」「専門性」ということさえも問い返すナラティブ・セラピーの実践や、言葉と精神の関係を「人間」の裏側まで遡行して考え抜くフロイト・ラカンの精神分析の方にむしろ関心がある私にとって、彼女のテキストの扱い方や理論的枠組みについては納得しか

ねる部分もあった。だがそれよりも、哲学プラクティスが、アメリカナイズされた心理学や精神療法を批判する一方で、実存哲学との関係が深いことをあらためて思い知らされた。エミーのような試みは哲学と精神医学との融合を試みる木村敏の仕事(彼は恐らく日本で始めて「臨床哲学」という言葉を使った人だ)を思い起こさせる。

聴くことの技術——コーチング

さて、哲学プラクティス(カウンセリング)の具体的なやり方を知りたいと思っていた私にとって、もっとも明確なヒントを与えてくれたのは、イーダ・ヨングスマ Ida Jongma のワークショップ“ The application of Socratic tools in a counselling session ”だった。オランダ出身の彼女は、アーヘンバツハのように明確な方法をもたないプラクティスから距離をとり(彼女はドイツのグループは「秘教的」だと揶揄していた)、むしろソクラティック・ダイアローグの明確な方法論を支持し、それをカウンセリングに取り入れ、「コーチング」という手法を編み出した。「コーチング」は極めてシンプルなもので、3名で1つのグループを作り、それぞれが「クライアント(相談者)」、「コーチ(助言者)」、「観察者」のロールプレイをする。私もワークショップで実際にこの方法を試してみることになった。「何か悩みはありませんか」ときかれて相変わらず答えられなかった私はコーチ役をするハメになる。コーチの役割は、とにかくクライアントの話を丁寧に聴き、問題点を定式化し、助言を与え

ることである。私はすでにソクラテック・ダイアローグを何度も経験しているので、こうした役割は十分頭に入っているつもりであったが、やはり実際にやってみるのは難しい。言葉が十分使いこなせないうえ、すでに「プロ」として活動している二人を前に緊張するあまり、私は相手の話を十分聴かないうちにどうしても自分の意見を言ってしまい、後から観察者役の人に「よい聴き手ではない」とこっぴどく批評されてしまった。コーチングの要は、ソクラテック・ダイアローグの場合と同じく、話し手に十分話させ、適切な質問を行い、話し手の言葉から自然に問題点が浮かび上がるように対話を導くことである。実はナラティブ・セラピーでも同様のことがよく言われる。「聴く」ことは、心構えでも理屈でもなく、十分に磨かれた技術を必要とする。こうしたコーチングにインパクトを受けた私は、帰国後大阪大学での「対話技法論」の授業で早速これを試行し、コーチングが1対1のカウンセリングにも、ソクラテック・ダイアローグのファシリテータのトレーニングにも使える有効な方法であることを確信した。

哲学の家庭教師

会議最後の日、「円卓討論会」と名づけられたセッションの一つでは、「プラクティスで何の哲学を？」という興味深いテーマについて議論が交わされた。哲学とプラクティスへの参加者それぞれの思いが込められた議論は、臨床哲学が生まれたばかりの頃の授業の模様を彷彿とさせた。様々な意見が出されたが、やはり

参加者の多くは、哲学プラクティスが特定の知識、権威、伝統、専門性によりかかることに懸念を示した。最後の最後まで最初の問いに明確な答えが出ないままだったが、なかでも興味深かったのは、ドイツの会議で知り合ったリディア・アミール Lydia Amir の答えだった。スピノザを研究し、イスラエルの大学で哲学を教えながらプラクティスをしている彼女は、哲学プラクティスもいわば哲学の家庭教師として、哲学の専門知識を教えていいのだ、と主張した。彼女の答えには誰もうまく反応できなかったし、彼女も単に思いつきを言っただけかもしれない。しかしリンドセットの講演と合わせて後で考えてみると、なかなか含蓄のある答えだったかもしれない。大学の授業で学生を相手に教える場合は、自分の専門研究を深めたり、あるいは学生が研究者になるために必要な教養や技術として哲学(史)の知識を身につけさせることが目的であることが多い。しかし、必ずしも哲学研究者になるわけではない人を相手に家庭教師としてその人に必要な哲学を教える場合はどうであろうか？ 哲学の知識を教えるにしても、問題は何を教えるのかだけではなく、相手のニードを臨機応変に見極め、それに相応しいスピード、リズムで応えていかねばならない。まさにそこにリンドセットの言うような「哲学的な仕方」が問われるのかもしれない。実はこのことは、子どものための哲学など、哲学(史)の知識を身につけることが当たり前ではない、アカデミズムの外で行われる哲学教育に通底する問題だと今になって気がついた。なぜなら臨床哲学に集う人たちの多くは、ア

カデミズムの哲学ではなく、彼女ら／彼らのニードに応じた哲学を求めているのだから。

フレキシブルな哲学？

最後に。今回の会議で得た最大の成果はやはりイーダの「コーチング」であろう。面白いことに、哲学カウンセリングにしても、ソクラティック・ダイアログにしても、ひとたび国境をまたぐとイーダやヨス・ケッセルスなどの人たちの手によって、ネルゾンであれアーヘンバッハであれ伝統の重みがそぎ落とされ、誰にとっても分かりやすいしかし明確に効果のある方法として生まれ変わる。当然こうした方法化・道具化に懸念を示す人たちも少なくないだろう。しかしそうした批判はいつでもできる。大切なことはこうした方法の実践一つ一つの中から見えてくるものを見失わないことだと私は思う。コーチングにせよ、ソクラティック・ダイアログにせよ、方法と呼ばれるものは極めてシンプルであるが、それを通して語り出される言葉は非常に豊かである。私自身いわゆるカウンセリングというものに懐疑的であった。しかし相手が単数であるか複数であるかによって若干のやり方に違いがあるだけで、対話を営むこと自体には変わりがないのかもしれない。(もとより「カウンセリング」は「セラピー」ではなく、「相談」というほどの意味だ。日本では「カウンセリング」という言葉があまりに臨床心理に独占されているがゆえに、「哲学カウンセリング」という言葉が異様に聞こえるのかもしれない。) 欧米のプラクティショナーたち

にとってみれば、1対1のカウンセリングは哲学カフェ／ディナーや子どものための哲学、ソクラティック・ダイアログやビジネス・コンサルティングに並ぶ選択肢の一つに過ぎないようだ。そこでの共通のメディアは言葉であり、言葉を交わすスタイルは対話なのである。哲学する者は時には内省的であらねばならないが、対話は内省的であるだけではうまくいかない。対話のなかで哲学はリフレクシヴだけではなくて、十分にフレキシブルでもなくてはならない。

(ほんまなおき)

ヴァイキングの船(オスロ湾)

「魂のための医療」

フィアリーによる、がん患者との哲学カウンセリング

会沢久仁子

「がん患者との哲学カウンセリング」 ワークショップ

臨床哲学研究室では医療や福祉の現場でのケアについて議論を続けている。私自身も、1999年に訪米ホスピス研修に参加して以来、終末期のケアに関心を持ち、関わっている。今回の哲学プラクティス国際会議では、「がん患者との哲学カウンセリング」というワークショップがアメリカ合衆国のヴォーナ・フィアリー (Vaughna Feary) によって行われた。私は哲学カウンセリングを耳にし、また合衆国のホスピスを見聞して以来、ホスピスケアのなかで哲学カウンセリングが心理カウンセリングと似た役割を果せるだろうとのアイデアを持っていたので、このワークショップに関心を持って参加した*1。

フィアリーは、医療分野において、がんなどの慢性病や命にかかわる病の患者を助ける補完医療として、哲学カウンセリングを推進する。これは、哲学カウンセリングに限らない哲学プラクティスの、医療分野での取組みの一つとして注目できる。また哲学カウンセリングとしても、

今のところ哲学者が個人で開業して、個人から相談を受け付けるのが多いと見えるなかで、それを医療分野に位置づけ、関連の専門職種と連携しながら、特定の人を対象に行うのは、意欲的であり、注目できる。

フィアリーがそのような哲学カウンセリングに取り組むのは、彼女自身ががんと脳の手術のサバイバーであることにもよるだろう。フィアリーは50歳代ぐらいの貫禄のある女性で、「倫理・教育コンサルタント」の肩書きで哲学プラクティスを行っている。また大学の哲学科の教員でもある。

ワークショップでは、がんなどの病を患うクライアントへの哲学カウンセリングの理論と実践について意見や経験を交換することを目的に、新しくがんと診断された患者のためのグループカウンセリングのプログラムをフィアリーが参加者に紹介し、また途中でグループに分れてフィアリーが設定した問いを議論した。参加者10数名のうち、医療に関わる仕事をしているのは3名程で、がん患者の自助グループ活動をしている女性が1名いたが、その他はがん患者との関わりはあ

まりないようだった。

この文章では、ワークショップで配られたフィアリーの論文「魂のための医療 - がん患者との哲学カウンセリング」(“ Medicine for the Soul: Philosophical Counseling with Cancer Patients ”)と資料とに基づき、フィアリーの哲学カウンセリングの理論と実際のプログラムとを簡単に紹介し、医療分野での哲学プラクティスおよび哲学カウンセリングの可能性を考えたい。

補完医療としての哲学カウンセリングの歴史的背景

がん患者のQOL向上と延命のために、心理学的介入の効果はまだ確定的ではないものの、研究が進められ、合衆国のがん治療の先進病院では「統合医療」を掲げている。がんに対する心身アプローチは補助的治療の重要な選択肢となるだろう。フィアリーはがん治療の現状をこのように見て、哲学カウンセリングががん患者を助ける補完医療の役割を果たすことができると主張する。

フィアリーは、まず哲学と医療の歴史を次のように通覧することによって、補完医療としての哲学カウンセリングの必要性を示す。哲学プラクティスを行う人々がよく引合いに出すように、古代ギリシャで哲学が始まった当時、人々は哲学を生き方と考え、人生の諸問題を哲学的に考え、哲学者に相談していた。また、エピキュロスやキケロに見られるように、また現代のヌスバウムがこの伝統を「医療的倫理学」(medical ethics)と呼んで特徴をまとめているように、哲学は魂のた

めの医療(medicine for the soul)として、身体の医療と類比的に捉えられていた。しかし実際には、当時哲学と医療は別領域に置かれていた。中世でも同様である。そして17世紀にデカルトが物心二元論を打ち立てて以来、自我や心身問題について哲学的思索が展開されたが、1960年代に応用哲学が登場するまで、哲学は日常生活から離れていった。この間に、自我についての哲学的思索の展開の一つとして臨床心理学が誕生し、近代哲学が魂のための医療を提供しなくなった空白を埋めて、哲学カウンセリングの代用となった。同時に医療分野では、近代医療が全人的治療を提供しそこなった空白を埋めるかのように、「代替医療」(alternative medicine)の名の下で中国医療やインド医療、瞑想、マッサージなどさまざまな技法が人気を得て、特に合衆国ではビッグビジネスになった。そして病院もこれらのサービスを、従来の治療の代替ではなく補完として提供し始めた。心理療法(psychotherapy)ないし一種の心理学的カウンセリングも、サービスの一部として病院で提供されるようになった。現在これらは、「心身医療」(Mind Body Medicine)とか「統合医療」(Integrative Medicine)、「補完医療」(Complementary Medicine)と呼ばれて、研究が盛んである。しかし医療分野で哲学者は、医療倫理のコンサルタントは多いが、「魂のための医療」としての哲学カウンセリングとその研究に取り組む者はまだほとんどいない。フィアリーは、以上のように大雑把ではあるが補完医療としての哲学カウンセリングの歴史的背景をまとめ、医療を受ける現在の人々が人生の諸問題を扱

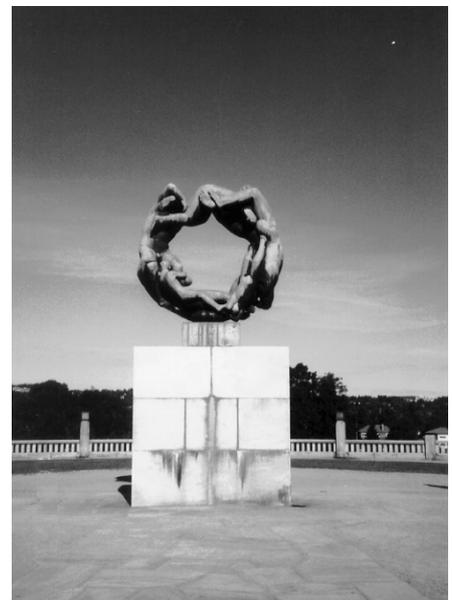
う哲学カウンセリングを必要とすることを示す。なお、日本で補完医療として哲学カウンセリングを考えるならば、欧米との歴史的背景の違いに注意しながらその有効性を考える必要があると、一言付け加えておく。

哲学カウンセリングの機能や、留意点

次に、哲学カウンセリングは補完医療としてどのように機能するのか。フィアリーは、哲学カウンセリングが特に次の4つの点でがん患者にとって治療的でありうると述べる。1) 病と病から起る人生の諸問題をよりよく受け止め、決定し対処するようがん患者を助けることができる。2) 自分の健康のためにより適切に振舞うようがん患者を助けることができる。3) がん患者が治療的コミュニティを作り、またより公正で応答的なヘルスケアシステムを作ることを手助けすることによって、がん患者をエンパワーできる。これら3点をまとめて、哲学カウンセリングはがん患者のquality of life (生活の質) を高めることができる。また、4) 心の健康が身体の健康に影響するとの研究が多く出てきており、哲学カウンセリングなどの補完医療が間接的に免疫システムを強化する機能を果すかもしれない。フィアリーは、哲学カウンセリングを含む各種の補完医療にはがんを治療できるとの経験的証拠はないゆえ、それらは「代替」医療ではなく、あくまでも「補完」医療だと注意するが、それでも精神神経免疫学に期待し、この分野の研究に哲学者が協力する必要性を示唆している。

また、補完医療としての哲学カウンセリングにおいて、カウンセラーの倫理的義務やコミットする価値も考えるべき点である。ワークショップでもこの点を議論した。フィアリーは、哲学カウンセラーの第一の義務として害をなさないことを挙げる。また患者の適切な決定を助け、自律の権利を尊重し強化することが必要であり、そのためにはがんの種類や治療方法、治療効果をよく知ることが最も必要だと指摘する。がん患者の置かれる社会的状況と彼らの抱える諸問題を知ることもちろん必要だ。

心理療法との違いも一つの論点だ。心理療法では感情とその原因に触れるようクライアントを励ますのに対して、哲学カウンセリングではクライアントの信念や世界観を哲学的に吟味し、それらの批判的精査が必要な理由を吟味する、とフィアリーは区別する。そして、がん患者の最優先事項は事実に触れ、必要な批判的・論理的思考を行うことであり、がん患者は心理療法を選択する前に、哲学的訓練を受けた者の援助が必要だと述べる。ただし、哲学カウンセリングにおいても感情的サポートは必要だとフィアリーも考える。したがって、哲学カウンセリングにおける感情の問題の扱いは、さらに



考えていくべきである。

なお、もちろん、この分野での哲学カウンセリングの実践と理論化は始まったばかりだ。フィアリーは、とにかく注意深く進めるようにと言う。できるところで訓練を積み、関連する研究成果を学びながら、小規模の試験的プロジェクトを行うこと、そして現実的な目標を設定し、適切な評価手法をデザインすることが必要だ。そして哲学カウンセリングの効果について患者が述べることに非常に用心深くなければならない。そうフィアリーは述べる。また他分野の専門家とのネットワークと相談、協同や、哲学カウンセラーの専門的訓練プログラムの整備の必要性も挙げている。

新しくがんと診断された患者との 哲学カウンセリングのプログラム

では、フィアリーが実際に手掛けた、新しくがんと診断された患者との哲学カウンセリングのプログラムを、7つのステップを追って見てみよう。

ステップ1は、カウンセリングの設定だ。まずフィアリーは、個人ではなくグループを対象にカウンセリングを行う。グループカウンセリングの利点は、クライアントが孤独感を和らげ、感情的なサポートを受けたり、情報の共有ができることや、議論が豊かになりうることだ。カウンセラーにとってもコストがかからない。また、グループの公開/非公開については、非公開の方が集中的になり望ましいが、参加者が一連のセッションの全てには参加できない場合があるので、休んだセッションについては別の機会に

参加できるようにフィアリーはしている。さらに、病種や病の進行段階、性別によるグループの同質/混成については、同質の方が望ましい。なぜなら、確かに命にかかわる様々な病の人々は同じ問題（例えば死を前にしていかに生きるか）を持っているかもしれないが、特定の性別や病に関連して起る特定の問題がある（例えば肺がんやエイズの患者では罪が問題になりやすく、乳がんの患者では自己同一性や自己価値が問題になりやすい）し、病の進行段階によっても扱うべき問題が違う（例えば病の初期段階では、死について扱うのはしばしば逆効果かもしれない）からだ。加えて、カウンセラーが指揮する構造化されたカウンセリングが、新しくがんと診断されたほとんどの患者にとって望ましいとフィアリーは考える。これは、現在の多くの哲学カウンセリングがカウンセリングの方向づけをクライアントに任せるのとは対照的である。しかし、まずカウンセラー主導で患者が診断のショックから立ち直るのを助けなければ、患者は哲学的問いを有益に探究できないとフィアリーは主張する。グループの人数は8～10人、1回2時間半のセッションを8回～15回のプログラムをフィアリーは実施している。その他にも場所やクライアントの獲得方法、営利か否かなど考えねばならない点があるが、ここでは省略する。

ステップ2は、つながりを築くことだ。フィアリーは、グループカウンセリングに先だち、一度個人面談を行う。ここでは第一にクライアントのストーリーを聞き、クライアントが信頼できる情報

を得て、理性的な決定をしているかどうかを確かめる。第二にがんとしばしば相関するストレスや鬱、性格特性、人生の主要問題が生活の大部分を占めてこなかったかを確かめ、もしそうならフィアリーのグループカウンセリングと並行して、他のカウンセラーの個人カウンセリングを紹介する。第3に希望を少しずつ染み込ませ、病と闘う気持ちを励ますようにする。そのために、サバイバーが書いた本の抜粋や参照リスト、心身医療の有用な研究情報をまとめた新聞記事などの情報セットをクライアントに渡す。

グループの最初のセッションでは、まず哲学とその役割を紹介する。次に参加者がそれぞれのストーリーを話すよう励まし、互いの理解と、彼らが自らの哲学的信念を確認するよう助ける。

ステップ3は、病への適切な対処を妨げる誤謬や不合理な信念に気づくことだ。がんにまつわる不合理な信念や、犯しがちな論理的誤謬と、正しい思考方法を紹介する。また適切な決定のために、事前指示や医者とのコミュニケーションなどの医療倫理の問題も少し扱う。

ステップ4は、ストレスを減らすための哲学的アプローチだ。第一にここでも論理学が有効だ。ストレスの源になる事柄についての信念を確認し、正しい信念か否か、その信念の帰結は何か、事柄についてのより積極的な見方があるかを考える。第二に、道教や仏教、禅などの東洋の哲学や、ストア哲学の観点を知るのも役立つことがある。

フィアリーをはじめ哲学プラクティショナーたちが東洋哲学に関心をもっていることは、国際会議でも強く感じた。

プラクティスの観点で東西の哲学の伝統を共通に捉えて考えてみる必要がある。とりわけ日本で哲学プラクティスを行い、人々の信念に向き合うには、日本の思想の伝統を理解し、西洋哲学の意味や、東西の哲学の関連を意識する必要がある。

ステップ5は、人生の意味や、よい人生、愛、友情についての探究だ。幸福や、自己同一性、許し、孤独の意味もテーマになる。これらについて参加者の洞察を分ち合い、異なる観点相互の連関を考える。その際、問いの意味を説明したり、議論のきっかけに短いテキストを使うとよい。また、ソクラティック・ダイアローグの方法も有効だ。

ステップ6は、健康と栄養、運動についての哲学的観点だ。健康や身体概念、我々と自然との関係や、散歩やヨガについて、異なる哲学的観点を提供する。栄養士や理学療法士、ヨガのインストラクターをゲストスピーカーに呼ぶのもよい。

ステップ7は、社会的エンパワメントだ。コミュニティの本性や、個人の健康問題の社会的・政治的次元を考える。そしてがん患者がいかに自らをエンパワーし、ヘルスケアシステムの変革に貢献できるかを議論する。

以上が、新しくがんと診断された患者との、フィアリーのカウンセリングプログラムだ。最後のセッションでは、まとめを行い、病とこのカウンセリングを通じて人生についての哲学的観点がいかに豊かになったかを参加者が話す機会とする。

フィアリーは論文の結論で、哲学の伝統が真実や愛、癒しの真の意味に焦点を

合わせるよう私たちに求めて、病が剥ぎ取り破滅させた、私たちが気遣うものや人生の美しさの多くを取り戻すことができると述べる。また私たち個人の癒しの探究が、それらの探究に意味を与える優美な哲学的伝統のうちに最終的に位置していると述べる。

このように、フィアリーのカウンセリングプログラムは、哲学を生き方あるいはプラクティスとして捉え、「魂のための医療」として、がん患者のクライアントが現に用いている信念と直面している諸問題とに関わり、哲学的観点からそれらの問題に広く対処しつつ、さらなる哲学的探究を誘うものとなっている。またフィアリーのプログラムからは、人々が病と病から起る人生の諸問題に適切に対処するために、医療に哲学プラクティスを取り入れていくことの有効性がわかる。

ただし、医療への哲学プラクティスの取り入れ方は、今後さまざまな工夫が可能だろう。既存の医療および補完医療の再編と統合のなかで、哲学プラクティスを何らかの形で医療のなかにしっかりと位置づけていかねばならないだろう。

医療と臨床哲学、哲学カウンセリング

臨床哲学も、医療分野での哲学プラクティスを、ソクラティック・ダイアローグや哲学カフェなどのワークショップを通じて行っている*2。哲学カウンセリングが臨床哲学のなかにどのように取り入れられるかはまだわからないが、これまでに傾聴ボランティアを試みたり*3、聴くことの意味を考えてきたし*4、今回の国際会議で得たコーチングの方法も現在試

みている*5。人と関わり対話する臨床哲学は、「カウンセリング」を名乗らないとしても、それと共通する要素がある。したがって今後も哲学カウンセリングの動向に注目しながら、臨床哲学の活動を進めていきたい。

*1 筆者の訪米ホスピス研修での心理カウンセリングのリポートは、「臨床哲学のメチエ」Vol.5(特集:サングレ・デ・クリストホスピス 研修報告) 2000年を参照。

*2 例えば、「報告 MAP CLUB 「ナースがケアで立ち止るとき」」や「日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会に参加して」(「臨床哲学のメチエ」Vol.8、2001年、pp28-33)を参照。

*3 「臨床哲学のメチエ」Vol.3(特集:ケアの現場に触れる) 1999年を参照。

*4 例えば、鷲田清一『「聴く」ことの本質 - 臨床哲学試論』、TBSブリタニカ、1999年を参照。

*5 本間直樹の報告を参照。

(あいざわくにこ)

オスロの街の哲学者たち

寺田俊郎

東京からコペンハーゲン経由でオスロに降りたのは月曜日の夕方だった。同日大阪を発った臨床哲学の同僚たちはまだ宿に着いていなかったもので、ホテルの真向かいのカフェでビールを飲みながら待つことにした。夕食どきで賑わっている屋外の席に着くと、向こうにどこかで見た顔が見える。哲学プラクティス学会やソクラティック・ダイアログ学会で知り合ったイスラエル、オランダ、合衆国の哲学実践家たちだ。再会を喜びあっているうちに、大阪の同僚たちが到着し、その他の学会参加者も合流して、夜更けまで話した。

翌日、郊外にあるオスロ大学のキャンパスで始まった学会では、精力的にプログラムに参加したが、木曜日にはさすがに疲れを感じて、午後のセッションを抜け出し晴天のオスロの街を散策して骨休めをした。私は、主にソクラティック・ダイアログ（以下SD）と哲学教育に関する発表やワークショップに参加したが、ここでは4つのセッションに絞って簡単に報告したい。

ベルギーのロッセム（Kristof Van Rossem）は、オランダのダーレン（Wieger Van Dalen）と組んで「SDにお

ける談話の衝突 The Clash of Discourses in Socratic Dialogue」というタイトルでワークショップを行った。タイトルからすれば、SDの途中で対話が座礁したときの対処法をみんなで考えるという、SDのファシリテータ向けのセッションのようだが、実は初心者入門も兼ねており、簡単なSDの歴史と手順の紹介の後、「沈黙を守る方が話すよりもよいのはどんな時か？」という問いを立てて短いSDを行うというものがあった。目的が複数あるうえ構造が複雑で、しかも参加者の大半はSD未経験者であり、まったくうまくいかなかった。「談話の衝突」というのは、ロッセムが成人教育で実施しているSDにおいて、例の提供者がその例のなかでとった行動に対し、参加者の一人が非常に感情的な反応を示したために対話が中断したことを指す。彼はこの経験自体を一つの例として、短いSDを行おうとしたのである。なぜこのようなやり方を選んだのか理解に苦しむが、ここで紹介するのは、それなりに学ぶところがあつたからである。

ロッセムは、アントワープの教育機関で成人教育の一環としてSDを行っている。たとえば、社会教育の専門家が対象

であれば、「社会教育の根底にある価値観と倫理観を明らかにする手段として」SDを行う。目標として次のものが掲げられる。1. できあいの答えを人々に押しつけるのではなく、核心となる問いを問うことを学ぶ。2. 人々の間にある違いを強調することによって対立をひき起こすのではなく、理解を深め向上させる方法を探究することを学ぶ。3. 職業上の行動の根底にある当たり前のこととされている前提を根本的なレベルで問うことを学ぶ。このように、ベルギーをはじめヨーロッパの多くの国々で、SDは公の機関において一定の位置を得、実践されている。

そのロッセムが、SDの理論的根拠に対して疑問を表明することをためらわない。彼がこのワークショップを企画した第一の動機はその疑問にあったように思われる。SDはソクラテスとカントの伝統を継承するものだが、実践を重ねれば重ねるほどその伝統に対する疑問が深まると、ロッセムはいう。人が本当に自分で考えるのはいつか？ 明確に言葉にできる概念からはみ出る思考があるのではないか？ 合意に達するとはどういうことか？ SDにおいて感情はどこに位置づけられるか？ そもそも哲学における対話の意義は何か？

SDの創始者ネルズンは、彼なりの確固とした理論的基盤の上にSDを築いたつもりだったが、もはや実情はそうではない。SDはそれを実践する人々の経験に基づいてつくられてきたし、現在も試行錯誤を重ねてつくられてつつあるのである。次に紹介するノルウェーのヘレストッド(Henning Herrestad)の発表も、

それをよく表している。

今回の学会の組織委員長でもあるヘレストッドは、「短いソクラティック・ダイアログ The Short Socratic Dialogue」と題して、オスロで工夫されたSDについて報告した。オスロの実践家たちは、最近オランダから経験豊富なファシリテータを招いて講習を受け、SDを本格的に導入したが、SDは時間がかかり過ぎてクライアントの要求にあわない。そこで、時間を短縮する工夫が必要となる。ヘレストッドらの出した答えは、「SDの核心は、参加者によって語られた物語りを分析することによって問題を探究することにあり、時間に制約がある時は意思決定や合意は重要ではない」というものだ。SDの目的は、偽なる理解から脱却し真理を探究するというより、理解を豊かにすることにある。物語は概念の分析の手段ではなく、物語が語られることそのことが大切であり、概念の分析はむしろ物語に新たな光を当てる手段である。そして、SDがうまくいったといえるのは、参加者が力づけられた(be empowered)ときである。SDを経験した人々の多くが感じる、物語が語られそれに様々な方向から光が当てられるプロセスの面白さを重視し、その他の面を思いきって削ぎ落とすという提案である。こうして、オスロでは1時間から半日の「短いSD」が行われている。

時間短縮は、SDを哲学プラクティスの一環として実践することを真剣に考える人々には切実な問題であり、質疑では時間短縮の工夫が話題の中心になった。しかし、やはり根本的な問い「ではなぜSDなのか？」も問われずにはいなかっ

た。哲学実践家のなかには、SDの可能性についてはじめから否定的な人も少なくない。今回の学会でSD関係の発表が少なかったことや、ドイツのソクラテス者(Sokratiker)たちが一人も参加していなかったことも、その辺りの事情を反映していると思われる。そのようななかでなぜSDなのか？ヘレスタッドの答えは、哲学者とは、人々の間で哲学的に思考すること、思考によって人々を力づけること、共同的思考を促すこと、これらを通じて社会のなかで哲学を実践する者であり、その実践の道具としてSDは捨てがたい魅力をもっているというものであった。

さて、合衆国の哲学者で子どもの哲学を実践し、日本語訳された著作も数点あるマシューズ(Garreth Matthews)が全体会の講師として招かれ、「とまどいを抱いて成長すること Growing up With Perplexity」と題して話した。豊富な経験から実例を引きながら、彼が子どもとともに哲学することを心から楽しんでいることが伝わって来るような話ぶりだった。子どもはごく幼いころから哲学的なとまどいを表明するものである。そのとまどいにつきあい一緒に考えることは、おとなにとっても貴重な機会であり、子どもを尊重することでもある。定年退職した今も、マシューズは小学校などで子どもと一緒に哲学しているそうだ。低学年には彼が自分でつくったお話を聞かせることから始めるが、高学年の場合は『ゴルギアス』や『国家』などプラトンの対話編を使うこともあるという。

そのマシューズも参加して、「子どもとともにする哲学」というワークショップ

が開かれた。合衆国のゲーリング(Sara Goering)がカリフォルニアのロングビーチ学区で行っている哲学教育の活動「学校で哲学を推進するためのセンターCSULB」の報告を行い、討論が行われた。彼女の報告は、哲学教育の「評価 assessment/evaluation」に焦点が当てられていた。哲学教育における生徒の達成度を評価することは、行政に哲学教育の成果を認めさせ、哲学教育を継続するために重要である。ゲーリングは、哲学する喜びを実際に感じている生徒を前にすると、評価の必要などないと感じるといふ。しかし、行政には何かを見せなければならぬ。すでに冊子として出版されている幾つかの「テスト」が紹介されたことは、いかにも合衆国らしいと感じた。

ゲーリングが哲学教育のメリットとしてあげたのは、認知的(批判的かつ創造的)な思考の技能、行動の技能、哲学的な意識と表現などを向上させることである。はテキストを読むこと、暗黙の前提を知ること、適切な議論をすること、自分の見解に根拠を与えること、論理的な推論をすること、反例を創作すること、論議の限界を知ること、を含む。

は他の人のいうことをよく深く聴くこと、適切な質問をすること、多様な観点を知らること、他の人の立場で考えること、などを含む。は、哲学的な問いの「未決着な unsettled」という性質を知ること、哲学と歴史や日常生活とのつながりを知ること、哲学的なものの見方を表現することである。

とに顕著に現れているように、基礎学力と市民としての行儀の習得に貢献す

ることに哲学教育の大きなメリットが見い出されている。学校に「飽きている」生徒たちは、哲学の授業で、哲学的な問題を考える仲間がいることを知って喜び、考え、話し、聴くことに「わくわくする be thrilled」。それを動機として生徒は基礎学力と市民としての行儀を身につける。哲学の授業にそういう側面があることは、確かだろう。そして、そういう側面こそ行政にアピールすることができる好材料だろう。しかし、討論で「行儀よく」させることは哲学の目的ではない、という反論があった。結局、市民としての良識を権威主義的に押しつけることになる、と。私も、哲学の「行儀悪さ」に無自覚であったり、避けたりすることには反対である。しかし、そういう「行儀悪さ」が、「わくわくする」ことにつながり、楽しく考え、話し、聴くうちに、生徒が結果的に「行儀よく」なることも事実である。そういう経験を経ないで身につけられた「行儀よさ」に、私は脆さを感じる。哲学の「行儀悪さ」と市民としての「行儀よさ」は必ずしも矛盾しないと考えるべきではないか。

初日の夕方、オスロの実践家の自宅で歓迎会があった。閑静な住宅地の一角にある普通の住宅だが、庭にバーが開かれ、バンドが演奏し、屋内外に歓談の輪ができた。空はいつまでもほの明るい。私は奥の書斎でオスロの実践家と話した。古い家具が据えられた落ち着いた感じのその書斎で、カウンセリングを行うこともあるという。このオスロの街で、彼らは比較的最近哲学プラクティスを始め、地道に活動している。私は、SDには可能性を感じるが、哲学カウンセリングに対

しては懐疑的であると話すと、「どこが違う？」と聞き返された。どちらも対話の一種ではないか、と。なるほど、とも思うが、やはりいろいろ疑問が残る。合衆国の哲学カウンセリングの第一人者マリノフは、すでにニューヨーク市立大学で哲学カウンセリングの講座を開講している。哲学カウンセリングの創始者アーヘンバハもまた、近くベルリンとミラノの大学で哲学カウンセリングの講座を開講するという。いったいどのような教育が行われるのか、たいへん興味深い。

(てらだとしろう)

「子どもとともにする哲学」 についての付記

教育に関する臨床哲学の活動は、大阪府立福井高校での授業など、「子どもとともにする哲学」に重なる部分があり、世界の「子どもとともにする哲学」関連のプラクティスには以前から注目している。しかし今回の特集では「子どもとともにする哲学」についてまとめて報告できなかった。そこで寺田報告に付記したい。

近所の子どもたちを集めての「哲学クラブ」(ノルウェー)

ノルウェーの二人の男女(SchjelderupとOlsholt)が、「子どもとの哲学的対話 ノルウェーのアプローチ」というタイトルで、子どもたちと行っている「哲学クラブ」について発表した。発表者は、近所の10歳から15歳の子どもたちを週に一度、自宅に集めて、哲学の対話をしている。「哲学クラブ」のねらいは、子どもたちと、様々な哲学的問いを不思議がり、その探究を楽しみ、面白がることだ。そしてこれは、アメリカ合衆国の「子どものための哲学」の先駆であるリップマン(Matthew Lipman)と「子どもの哲学研究所」(Institute for the Advancement of Philosophy for Children)が、デューイに依拠して、哲学を、子どもたちが自信を持ち、社会的に適應するのを助ける道具と考えることへの疑問表明でもある。発表者は、ソクラテスの対話のような真理の探究こそが哲学だと主張した。

質疑では、「哲学クラブ」の実際の様子話題になった。子どもたちは時間を忘れて議論に熱中することもあるが、走り回ったり、年上の子と年下の子や、男の子と女の子の間でいろいろな思惑が働いたりして、純粹に哲学的対話を楽しむのはなかなか難しそうだった。

発表を聞いて、子どもたちと哲学するこんな身近なやり方もあるのかと思う一方で、もし自分が日本でやるとして、一体どんなクラブ名を付けて、近所の親たちにどう説明し、子どもたちを誘ったら、子どもたちが集まるかはかなりの難問だとも思う。また、発表者が強調する真理の探究が、哲学プラクティスでよく

言われる生き方としての哲学とどのような関係になるのか、よくわからなかった。

大学と小学校教員との協同プロジェクト(ブラジル)

ブラジルで心理学を専攻する大学院生(Juliana Mercon Lestani)が、彼女の関わっている、大学と小学校教員との「学校での哲学」協同プロジェクトについて発表した。このプロジェクトは、大学の哲学と心理学と教育学が組み、5つの小学校の教員たちと行って、3年目になる。このプロジェクトで発表者は、大学と小学校教員とのつなぎ役(Mediator)として、小学校に通って教員の授業をビデオに撮り、授業の計画や評価を教員と議論してきた。また小学校の教員たちは定期的に大学に行き、哲学の学習会や、授業についての研究会をする。発表者は、自分が関わった一人の教員へのインタビューから、このプロジェクトを通じて教員に生じた人間関係などの変化と新たに生じた困難をまとめていた。

学校に哲学を導入するためにこのようなしっかりしたプロジェクトが行われていることに私は特に驚いた。またこのプロジェクトの特徴は、まず教員が哲学的なものを見方を身に付け、教育活動のなかで生かすことをねらう点にあると思う。学校で子どもたちとの哲学を進めるには、教員との協同作業が欠かせないことをあらためて思った。さらに、質疑の途中で発表者が「実際はいつも混乱している」と言い、これに参加者たちがうなずいて共感したのも印象に残っている。

(あいざわくにこ)

特集 2

ソクラテス者がやってきた、 Ja, Ja, Ja!

S D週間 in大阪

S D (ソクラティック・ダイアローグ) についてはすでにこの『臨床哲学のメチエ』で特集し、紹介しているが、ドイツで考案された哲学的グループ対話の方法論であり、教育・医療・企業倫理など広い分野で実践・活用されている。

臨床哲学研究室では、関連する哲学プラクティス(カウンセリングなど)の運動をも含めて1998年から関心を持ち、国際学会に参加するなどして欧米の研究者・実践者たちと意見交換してきた。その中でドイツを中心とする「ソクラティック哲学協会」との交流が深まり、2001年9月5日から9日にかけて、協会を代表する形でS D公認ファシリテーターのホルスト・グロンケ(ベルリン自由大学)とベアーテ・リティヒ(ウィーン高等研究所)の2人を大阪に招き、公開の講演会やコロキウム、S D(およびディレンマ・トレーニング)を開催することができた。日程は次のようなものであった。

9月5日(水) ホルスト・グロンケ氏講演

「ネオソクラティック・ダイアローグの理論と実践」(ドイツ語)

9月6日(木) 臨床哲学コロキウム「現代社会と実践哲学」

提題者:ベアーテ・リティヒ(ウィーン高等研究所) 霜田求(大阪大学・医学部) 稲葉和人(京都大学) 山中浩司(大阪大学・人間科学部)

9月8/9日(土日) ソクラティック・ダイアローグ、ディレンマ・トレーニング

以下はこの「SD週間」の催しのうち、SDとディレンマ・トレーニングの様態についての簡単な報告である。なお、講演会とコロキウムの報告は『臨床哲学』第4号(2002年)に掲載される予定である。

SDとディレンマ・トレーニングは英語で行われた。日本ではあまり耳にしたことのない英語による実践で、当初は危惧がないでもなかったが、それでもおおむね支障なく進行したことについて、グロンケとリティヒの両氏、そして参加者各位の意欲と能力に敬意と感謝を表したい。

論拠づけ(argumentation)を指向するSD

堀江 剛

9月8日、大阪大学待兼山会館において、ドイツからやってきたSD理論家、ホルスト・グロンケ氏のファシリテートで一日だけのSDが行なわれた。テーマは"How to deal with feelings?"、参加者は臨床哲学研究室の学部卒業生、院生、大学院卒業生、留学生、大学教員、看護学教員など七名の多様な顔ぶれであった。筆者はオブザーバーとして参加した。対話の内容については参加者のプライバシーに関わることも多いので、ここでは触れず、グロンケ氏のSDの進め方を中心に筆者の気づいたことを述べることにする。

まず参加者が例を出し合う場面で、お

もしろい工夫がなされた。参加者を二人(ないし三人)の小グループに分け、例の「話し手」と「聴き手」(および「観察者」)の役割を持たせ、交互に出し合った例の一つを選んでグループ全体に示し、それをまた一つに絞るという作業をした。これは、一日SDで時間が限られているため、通常なら一人一人から例を出し合い一つに絞る時間を節約するための方策である。また、話し手/聴き手という役割分担は、患者/医者関係のモデルに相当し、そこで「問題を話す」「問題を聴く」ことの難しさを体験する意味もある、と説明があった。

また例が一つに絞られ、その例を記述す

る場面でも、グロンケ氏は一定の枠組みを用いた。つまり、あらかじめ例の構造を、

1. 行為の前の状況 (situation before action/reaction)
2. 行為 (action/reaction)
3. その行為に対する自分の判断 (judgement)

の三つに分解して記述するのである。筆者の知っている限りでのSDでは、こうした例の分解的な記述は、記述が終了後でグループの議論の中で(グループが例をより構造的に理解するために)行なわれる場合はあっても、あらかじめ指定されることはなかった。今回のような例の記述の仕方は、なるほど例の構造をあらかじめはっきりしたかたちで把握することはできるが、他方で例の提供者の「語り narrative」に関する豊かな側面を切り落としているように感じられた。

さらに、例の提供者が「判断」を明確にした後、「なぜ提供者はそのような判断に至ったのか」、判断の前提となる規則や原則をグループ全体で探索する作業となる。ここでも、参加者が多くの「問い」を出し合って一つに絞り、それに答えていくといった通常のSDの作業は省略されている。このSDが行なわれる前の講演の際(9月5日)にもグロンケ氏は、SDにおける参加者同士の「論拠づけ argumentation」の作業を強調していた。今回のSDでも、この作業をあまり回り道をせず直接参加者に

行なわせてみよう、という意図があったと思える。

今回のSDは、すべて(参加者にとってもファシリテータであるグロンケ氏自身にとっても不馴れな)英語で行なわれたこともあって、また一日という時間的な制約もあって、十分な議論はできなかった感じが否めない。SD終了後の参加者の感想でも「型にはめられた」感じがするというものがあった。しかし他方、別の参加者からは「参加者自身の考えの根拠を厳しく問われる」ような実りある対話を経験できた、という声もあった。また「短時間でも議論の中身を精錬させていく」ことはできた、十分議論ができなかったのは、参加者の態度(意見や疑問をその場で発言しなかったことなど)に起因する部分も多々あったという反省も出された。全般的に見て今回のSDは、グロンケ氏が考える「論拠づけを指向するSD」をできるだけ簡潔に行なってみる、という一つのデモンストレーションの意味合いが強かったのではないかと思う。

(ほりえつよし)

ホルストと対話者たち



ソクラテック “ デイレンマ・トレーニング ”

中岡成文

デイレンマ・トレーニングのワークショップは2001年9月9日、待兼山会館会議室で行われた。ファシリテーターのホルスト・グロンケ氏が日本語を話せないため、基本言語は英語としたが、ごく一部便宜上日本語を使用した場合もある。

グロンケ氏によれば、デイレンマ・トレーニング（以下DT）はオランダで始められ、グロンケ氏周辺で改良された。DTは日常的事柄、つまり葛藤があるのに絶対の解決法が見出せない状況で役立ち、管理者、ビジネス、医療の世界で用いら

れている。DTはきちんとした手順つまり構造をもつので有効とされる。ソクラテック・ダイアログ（SD）との違いは、SDでは分析のあとすぐに決定がされるのに対し、DTではまず論拠を求め、そこから決定に至るところにある。

デイレンマを語る第1段階に入った。本日のテーマ「私は（依頼に対して）いつノーと言うか」に関して、参加者各自が自分の直面したデイレンマを短い文章やキーワードにまとめた。参考のためにグロンケ氏は、「ある女性からSDを手伝いたいと申し出を受けたが、彼女は有能でなかったため、私ははっきりとノーとは言わなかったものの、それを避けるようにした」という事例を持ち出した。これを受けて参加者が一人ずつ自分の

デイレンマを語ったあと、どの例が最適と考えるかについて、まず3人ずつの組に分かれ、次に全体で話し合った。自分の推薦する例の長所（「プロ」、たとえば一般性がある）、反対する例の短所（「コン」、たとえば本当のデイレンマではなく逃げ道がある）を指摘しあい、その過程で自分の推薦例を変更することも許された。最終的に選ばれた例は、「大学で1年生相手に哲学を教えているが、あるとき再履修の学生（4年生か5年生）が来て、もし落ちたら卒業できないので通してくれと頼んだ」というものだった。

昼食後セッションが再開され、選ばれた例が詳述された。今回のDTは英語で行われたが、この詳述（と他のいくつかの発言）は日本語で行われ、他の参加者も協力して大意を英語でファシリテーターに伝えた。その学生は何を頼んでいるのか、あなたはその状況で何を考えたか、あなたは学生にどう言ったか、結局どんなデイレンマがあるのか、その依頼にイエスと答えたほうがよい理由、逆にノーと答えたほうがよい理由などについて、事例提供者だけではなく、他の参加者もいろいろ意見を出し合った。グロンケ氏が用意した資料の問い（たとえば「誰が決定に関与しているか、あるいは関与する可能性があったか」）に各自が答えていった。グロンケ氏は、事例提供者は

その学生に、「では二人で相談してみよう」と提案し、対話することで、学生本人を決定プロセスに引き入れることができたはずだと指摘し、この指摘は短いが自分としては「分析」のつもりであると付け加えた。

最後に各自の結論、つまり「事例提供者にアドバイスするとすればどう言うか」についてまとめた。あるアドバイスを英語のまま紹介すると、Make sure the student is sincere and tell him to attend

as many classes as possible. If he is good enough, give him the credit. というものだった。それを受けて事例提供者が自分の結論を出したが、その結論に対して「いまあなたはどう感じるfeelか」とファシリテーターは他の参加者に問うた。いよいよの最後に、DTについてどう思うか、役に立ったかとグロンケ氏は質問し、それほどhelpfulではなかったという厳しい意見と、よかったという意見とが出された。

(なかおかなりふみ)

SD " What is a good teaching? "

経過と、遡及的抽象、進行方法の検討

会沢久仁子

ベアーテ・リティヒをファシリテーターに迎え、" What is a good teaching? "(「よい教授とは何か?」)というテーマで、2日間のソクラティック・ダイアログ(以下、SD)を行った。その経過を段階に分けて報告するとともに、今回のSDの特徴として「遡及的抽象」を挙げ、その実際上の制約と、制約に応じたSDの進行方法とを考えたい。

経過

0. 自己紹介 参加者は、臨床哲学研究室の大学院生と卒業生に、オーストラリア人留学生と日本在住アメリカ人の計

8名であった。ベアーテの指示で、これまでのSDの経験と、今回のテーマである教授経験の有無、今回の参加にあたっての関心を各自述べ、自己紹介をした。

1. 例を出す 第1セッションで、参加者は今回のテーマに関してそれぞれ自分の経験にもとづく例を出した。例にはその内容をすぐ思い出せるようなタイトルを付け、そのタイトルが前の模造紙に書き出された。参加者全員から、高校や大学、塾での諸科目の教授経験や、授業を受けた経験、外国語習得の経験などの例が出された。

2. 例を選ぶ 休憩後、第2セッションで、例を一つ選んだ。ベアーテが示した、よい例の4つの基準(シンプル、参

加者が考えやすく、考えたいと思う、テーマに関連する、終っている)(加えて英語力)をもとに、まず二例に推薦が集まり、議論を経て、大学での法学教育の例が選ばれた。

メタ・ダイアログ 2時間の昼休みの後、第3セッションでメタ・ダイアログを行った。ここでは、ベアーテに代って参加者の一人が進行を務め、SDの場の雰囲気や各人の感じていることを話し、またSDの方法についてベアーテに質問する。私は、自分がここまでの議論をスムーズに進めようとしてきたが、例を選ぶ議論の際、英語を母語とし、SDに初参加の参加者の発言が少しアグレッシブに感じられて、議論しにくかったことを言ってみた。これに関連して、発言の際、日本人参加者は言いたいことがあってもすぐには出さず、まわりの様子を見て自分の順番をうかがうこと、それが外国人参加者にとっては不満なことも出された。これらには、日本人が外国語で、異なる文化の人々とコミュニケーションする際の問題の一端が表れていた。西洋人はまず自分の立場を決めて、互いの立場の違いを明白に示そうとし、これは「アグレッシブ」とは言わないこと、また日本人は自分の立場をあまりはっきりと定めたり示さず、まわりの様子を見ながら自分の適切な立場を定めていこうとすることを、互いに話した。こうして、議論の参加者が互いにどう振る舞っているかが明確になり、その後以上の点は気にならなくなった。またベアーテにとっても、そのような西洋人と日本人のコミュニケーションの仕方の違いは、驚くとともに興味深かったようだ。適切なタイミ

ングで面白いメタ・ダイアログができた。

3. 例の記述 第4セッションで、例の提供者、Iさんが例を話し、進行役がそれを前に書き出した。例は、裁判官から大学教員に転じた当初の教授スタイルを、学生を裁判所見学に連れていったのをきっかけに、違う教授スタイルに大きく変えたというもので、二つの教授スタイルの違いに焦点を当てた記述だった。その後参加者は例についてIさんにさらに質問した。質問にはIさんの例に対する参加者それぞれの関心の違いが表れた。

4. 理由づけ これまで日本でやってきたSDでは、ここで例にもとづく問いをいくつも出す。そこで今回のSDについて「問いを出さないのか」と質問が出た。ベアーテは、問いは出さず、自分がドイツで行うやり方として、例の二つの教授スタイルの一方を選び、"This is a good teaching, because..."の形で理由を各自書くように指示した。そして各自書いたものを読み上げた。全員が第二の教授スタイルを選び、例にもとづいてその理由となる多くの要素を挙げた。第1日目はここで終了した。(後でベアーテに聞くと、問いを出すのは時間がないので省略したとのことだった。)

翌日はまず、昨日の最後に皆が挙げた理由のうち最も重要と思うものを各自一文で前に書き出し、それらを見ながら、例がよい教授だと言える最も重要な理由をまとめようとした。参加者は、「学生が自分で、また他人と一緒に考えること」と「身についた(embodied)知識を得ること」に注目した。「身につく」という言葉が英語では理解し難いこともあって、そ

れが何かをしばらく議論するうち、「学び方を学ぶこと (to learn how to learn)」という代替案が出された。しかし再び、「学び方を学ぶ」とはどういうことかが議論になり、学ぶことが何かわからなくなった。参加者の英語力不足もあって議論は混迷した。ベアーテは、このように最初は疑問でなかったことが疑問になるのはSDではいつものことだと言った。

午後のセッションでメタ・ダイアローグの時間が設けられたが特に問題はなく、すぐに内容の議論に戻った。ベアーテは「学び方を学ぶこと」の意味を例に帰って考えてみようと言った。やってみたが、うまくいかなかった。そこで、例になお証拠を求める必要があるか、例から離れてよいか問題になった。学生が「学び方を学ぶこと」は教授の目的だから、例の教授方法や学生の様子の中にそれをはっきり指し示すことはできないという意見が出て、他の参加者もこれに肯いた。こうして、「学び方を学ぶこと」の意味は定義されなかったが、参加者はこれまでの議論を通じていくぶん共有された意味内容で納得し、次に「学び方を学ぶこと」が教授目標となる理由を考えることになった。参加者は、学生が学び方を学ぶことによって「身についた知識を得」られ、これを用いて、「権威から独立に、自分で」、そして「自分のために」、「決定」できるからだと、学び方を学ぶ目的をさらにその理由としてまとめていった。

5. 答 ここまで来てベアーテは、では今回のテーマ、「よい教授とは何か？」に答えて、“Good teaching means that ...”をまとめようと言った。まず各自で答を作り、次に発表した。最終的に参加者

は、「よい教授とは、学生が自分のために自分でよい決定をできるように、学び方を学ぶ機会を学生に提供すること意味する。」という答で合意した。

最後にベアーテは、この答が最初に出した各自の例に当てはまるか、そして今回のSDに満足しているかと聞いた。多くの参加者は当てはまると答え、満足だと述べた。しかし実際にそのような教授をすることの難しさも指摘された。ベアーテ自身は、今回の進行の感想として、コミュニケーション文化の違いや、参加者の参加動機が多様だったこと、SDにお馴染みの理解し合う難しさを挙げた。

遡及的抽象と、その実際的制約

今回のSDの経過の特徴をまとめると、(1) テーマを問いの形で設定したこと、(2) 例からテーマに関連する様々な問いを出す過程を省いたこと、(3) 例を「よい教授である」と判断して、この判断の理由づけを行って教授の目的を遡ったこと、(4) 「よい教授とは何か」というテーマ自体に答を出したことだ。このようにテーマ自体に答えてこれほど抽象的な答に至ったのは、私には初めてだった。

つまり今回のSDは、例に対する判断の前提を論拠づけ (Argumentation) によって遡り、より普遍的なレベルの原理を探究する、「遡及的抽象 (regressive Abstraktion)」というSDの方法を前面に出し、最短で答に至るものだったと言える。

しかし、あの場で議論が進み、合意されたことであっても、今振り返ると、例えば「学ぶこと」や「学び方を学ぶこと」、

「知識が身につくこと」が十分明確にされたとは言えず、精確な論拠づけはできていない。今回例から様々な問いを出さなかったことも、例に対する多様な観点を落とし、例をよい教授と判断することの論拠づけを不十分にしただろう。また、遡及的抽象の過程で例からどのように離れてよいかも、今回のSDでははっきりしなかった。これらは参加者の思考・表現能力の制約や時間の制約に困っている。そして実際のSDではこれらの制約は常に付きまとう。もちろん、「遡及的抽象」を唱え、SDを始めたレオナルト・ネルゾン(Leonard Nelson)の理論では、我々は時間をかけてSDをすることによって、哲学することを学び、理性のなかにある普遍的原理を明らかにできる。つまり理論上はそれらの制約は越えることができる。(寺田俊郎「レオナルト・ネルソンのソクラテス的方法」『臨床哲学』第3号、2001年を参照。) だが、この理論の検討もまた必要である。

制約と目的に応じた、進行方法のバリエーション

さらに今回は、「よい教授」との判断の前提にあった、教授の目的と考えられるものを確かに取り出したが、「よい教授」についての新しい発見を私はあまり感じなかった。これも、時間の制約と思考・表現能力の制約のなかで、今回は抽象的な答に至ることに主眼を置いてこれを急いだため、多様な観点を出して組織できなかったことにより、やむをえないだろう。そしてこのように、実際の制約のなかでは、目的を絞り、それに応じてSDを進

行する必要があるだろう。

いくつかのSDの進行方法を振り返ってみても、それはわかる。例えば、臨床哲学のメンバーが初めて体験した、1999年の第5回哲学プラクティス国際学会プレカンファレンスのSDは、3日間で、テーマを「理解と誤解」とし、問いをSDのなかで立てた。(堀江剛「「ともに考える」ための道具 - Socratic Dialogueの経験から」『臨床哲学のメチエ』Vol. 4、1999年を参照。) また、2000年の第3回ソクラティック・ダイアログ国際学会では2日間のSDをいくつか並行して行い、それらはテーマを問いの形で立て、ディーター・クローンやリニ・サランが、今回のベアーテと同様、問いを複数出さず、テーマに最短で答える形の進行をしたそう。さらに、ソクラティック哲学協会主催の2001年2月のSDは、ベアーテとホルスト・グロンケが進行し、2日半をかけて、テーマを問いの形で立てるが、どちらも問いを複数出し、テーマの問いを変形・修正し、答を出したそう。(ホルストの進行については、中岡成文「ヴェルツブルクでのソクラティック・ダイアログに参加して」『臨床哲学』第3号、2001年を参照。)

このように、SDの基本は問いを立て、正しく答えることだが、制約に応じて進



ベアーテと対話者たち

行方法は変わる。時間や参加者の制約と目的を考慮し、何を問うかに重点を置いたり、問いよりも論拠づけに重点を置いたり、答に至ることを第一に、SDを進めることができる。また、哲学的探究のためだけでなく、倫理的決定やその訓練を目的にSDをする試みもある。(例えばホルストによるディレンマ・トレーニングを参照。) SDはグループでの哲学的探究の有効な一方法に見えるが、その方法の検討や習得、拡張は、さらに今後の

実践における課題である。

なお、今回のSDの進行の工夫として、自分で書くことが思考を助け、時間の節約になったことと、一つの例から得た原理を他の例に当てはめて原理の普遍性を検討したことも特に記しておく。

ベアータによる遡及的抽象を目指すSDを体験して、以上のように、SDの実際上の制約や、進め方について考え、課題を得ることができた。

(あいざわくにこ)

SDにおける Exampleの意味と、 Example-Giverの役割

稲葉一人

2001年9月8、9日と阪大キャンパスで行われた、「英語によるSD」に参加する機会を得た。SDへの参加はこれで2度目(いずれも英語)であり、今回は奇しくも Example-giver の役割もすることとなった。私は、自ら Mediation (調停) という紛争解決技法を法律家に教え、いかに争点について話し合いを進めるかについて研究していることもあり、SDには兼ねてから興味を有し、期待を持って参加したが、それを裏切らない極めて有意義なものであった。FacilitatorのオーストリアのBeateさんを始め、企画をしてい

ただいた、臨床哲学の皆さんにお礼を申し上げます。

本来は、私の役目として Mediation との比較をした論考を書くべきであろうが、それは別稿に譲るとして、本稿では、Exampleに焦点を当てて考えてみることにする。

SDでは、Exampleに関して概ね次のようなルールがある。各自が、主題に関して適切と思う、具体的で自らが経験した Example を提示する、その中から1つの Example を選ぶ、選ばれた Example の提供者 (Example-giver) は、そ

れに関して参加者から求められた必要な情報を提供する、Exampleから離れずに、状況を検討し、次第に一般的な根拠、その背後にある価値・原理を追求するというものである。つまり、SDでは(1つの)Exampleが、SDを進めるにあたっての導きとなっているのである。Exampleには、幾つかの条件が課せられる。主題に関連すること、自ら経験したこと、簡潔に記述されること、過去の出来事で、既に完結していること等である。

そこで、参加者とGiverに則してもう少し掘り下げて考えよう。参加者は、主題(我々の場合は、What is a good teaching?であった)に関連するExampleを選定する作業をする。この作業は、印象深い出来事から、直感的に行われる場合もあるが、通常は、主題は何を求めているかを分析し、自己の複数の経験を想起し、その中から適当と思われるものを選別することとなる。つまり、この段階で、参加者は、主題について自ら考え、自己の経験を、その主題との関連で位置付けることを求められる。

各人はExampleを述べ合う。述べ方は各人各様である。背景を分かってもらおうと、詳細な事情から述べる人もあれば、Exampleをそのものをsimpleに描写する人あり、また、熱のこもった描写のし方をする人から、しかたなしにExampleを示す人もある。このような過程は、対話において、極めて大事なintroductionである。人がお互い知らないものを示し合う、しかも、自ら体験したことを、それぞれ異なった表現方法で行う、非言語的な、tone、emotionをも含めて表現する行為は、表現者の「communication行為」と

して、communication前提(その人のpersonalな情報)を共有する行為といえる。

参加者は、各自の示したExampleの中から自分で主題に相応しいExampleを選択する。Exampleを各自提示することにより、それぞれの必要なpersonalな情報を得て、これから1つのExampleを中心に、対話のjourneyを楽しくできるか、自己の提示したExampleとの関連性・共通性があり、関心を持続できるのか等、様々な考慮の上で決断を下す。自己の提示したExampleを中心に対話を進めたいという思いがある反面、自らそれに勝るExampleを指示する義務があるという葛藤の中で、選定作業は進められる。

Example-giverは、それに関する情報を、自らではなく、参加者が必要と認めた範囲で提供する。Giverにとっては、sensitiveな情報も、求められると示す必要があり、toughな作業である。自分の経験を人に伝える作業とは、自分の思いをそのまま伝えるのではなく、相手の必要に応じて、場合によっては、一つのstoryを有する経験を、あえて分解して提示する必要があることを理解する過程でもある。

参加者は、Giverの真摯な情報提供を受けて、自らその意味を理解しようと努



めることになる。ExampleはGiverだけが「経験」したものでありながら、だれもが、そのExampleを、再度ここで対話を通じて、「経験」することになり、Exampleは個人の経験から、皆の共有資源となる。

Exampleから離れず、状況を検討し、次第に一般的な根拠、その背後にある価値・原理を追求する作業は、極めてcomplicateな作業である。具体的なExampleと、(抽象的な)原理原則とをつなぐ対話の円滑さを保つことは、Facilitatorの腕の見せ所であろう。しかし、時には、Exampleから脱線した発言、かみ合わない発言がとび出す。このようなnoiseとでもいうべきものが、逆にこれを乗り越えた際のお互いの信頼を生む。

Giverは、Exampleを脚色(理想的に描写)しがちだが、これはある程度参加者からの質問等により是正される。その隙間は、Giverの倫理義務となる。しかし、自分が過去に経験した出来事なのに、SDの中で様々な修飾(当時気づかなかったことに気づくということも含めて)を経て、本人自身が、SDの中で再度「経験」することとなる(この意味で、SDには、新しい経験が、二つの場面で生じる)。

このように、Exampleを中心にとってみても、Exampleは、対話を促進するために、順序立って、参加者に一つ一つの判断過程を経験させるtoolとなっていることがわかる。また、Giverは、新たにSDの中で「経験」し直すために、「transformation」を起こすことがあるのではないかと思う。私自身、自らのteachingに対する考えは変わったと思う。

SDでのExampleの条件がon-going-issueでないことや、参加者に参加の意欲があることは、かえって、様々な場面での参加者に同調の圧力がかかり、かつ、それに屈し易くさせることの原因となり得るなど、SDをこのまま、現実的で、切迫したon-going-issueに適應できるかには疑問があろう。しかし、様々なバリエーションの中で、SDのやり方と、他の方式(例えば、Mediation)とを融合させて「実践していく」ことこそ、SDの力であると思う。理性的な対話などできないと諦めるのではなく、また、理性的な対話ができないと思われる問題が増え、阻む環境が高まれば高まるほど(米国同時多発テロにおける世界とタリバンとの対話など)私はSDを含む、人の対話にかけてみたいくなる。これは、SDの、参加した私への、一つのmessageだと思う。

(いなばかずと)



ベアーテと対話者たち

2001年 SD活動の記録

- 2/11 臨床哲学研究室主催SD 場所：大阪大学
参加者：神戸大学学生その他（10名）
テーマ：性格とは 進行役：堀江
- 2/23-26 ドイツPPA主催SD 場所：Würzburg
テーマ：Wo hört der Spaß auf?（どこで冗談は終わるか）
進行役：Beate Littig（堀江ほか4名参加）
テーマ：Was zum Glück anderer beitragen?（他人の幸福に何を貢献するか）
進行役：Horst Gronke（中岡ほか5名参加）
- 9/5-9 ソクラティック・ダイアログ週間 in大阪
・Horst Gronke 氏講演「ネオソクラティック・ダイアログの理論と実践」
・臨床哲学コロキウム「現代社会と実践哲学」
提題者：Beate Littig（ウィーン高等研究所） 霜田求（大阪大学・医学部）
稲葉和人（京都大学） 山中浩司（大阪大学・人間科学部）
・SDテーマ：What is a good teaching? 進行役：Beate Littig（参加者8名）
・SDテーマ：How to deal with feelings? 進行役：Horst Gronke（参加者7名）
・DTテーマ：When do I say 'No'? 進行役：Horst Gronke（参加者7名）
- 10/6 日本倫理学会ワークショップ 場所：山形大学
「応用倫理学と臨床哲学——ソクラティック・ダイアログをもとにした対話の実践に向けて」
発表者：本間・堀江
- 10/13 大阪産業大学公開講座「平和学」 場所：大阪産業大学（大東市）
「ソクラティック・ダイアログ——共同的思考のために」
発表者：堀江
- 10/27 芦原病院看護部主催リーダー研修SD 場所：芦原病院（大阪市浪速区）
参加者：芦原病院看護スタッフ
テーマ：いつ私はノーと言うか 進行役：堀江、記録：本間（参加者11名）
テーマ：魅力ある人とは 進行役：会沢、記録：三浦（参加者9名）
- 11/24 近畿ホスピス・在宅ケア研究会 場所：ホスピスあおぞら（枚方市）
「新しい対話の方法論——ソクラティック・ダイアログの経験から」
発表者：堀江
- 12/1-2 ガラシア病院主催リーダー研修SD 場所：ニューライフガラシア（箕面市）
参加者：介護老人保健施設ニューライフガラシア介護スタッフ（8名）
テーマ：いつやる気は失せるか 進行役：堀江

街角でも哲学——哲学カフェ & バー @ 應典院

昨年(2000年)の11月4日(日)、應典院において臨床哲学 Cafe&Bar (以下、哲学カフェと略す)が開催された。哲学カフェとは、いくつかのルール(「ひとの話をよく聴く」「指名されてから発言する」「思想家の受け売りや自分の信条を長々と述べない」「自分の実感に基づいて話す」)のもとで、参加者が飲み物(アルコールもOK!)を飲みながら、普段使っている言葉で哲学的に考え、議論を交わすことをねらいとおり、今回は一枚の絵をきっかけにして議論をするグループ(研修室A)と、「他人の近さと遠さ」というテーマに基づいて議論をするグループ(研修室B)の、2つのグループに分かれて実施された。(なお、過去2回の哲学カフェの様子については、それぞれ、『メチエ』のvol.7,vol.8において報告されている。)

應典院での開催は前年(2000年11月5日)に引き続き2回目であったが、今回も男/女の性別を問わず、年齢も下は10代の方から、上は60代の方まで、計50名あまりの方々が参加して下さった。

哲学カフェは、「大学の外へと哲学を連れ出してゆく」という意味において、臨床哲学の試みの一翼を担うのはもちろんのこと、今回参加して下さった方々からいただいたアンケートの結果からも、その需要の高さが窺われ、私たちとしても、今後はさらにフットワークを軽くして、定期的開催していきたいと考えている。

臨床哲学 Cafe&Bar

進行役の感想

テーマ：「他人の近さと遠さ」

進行役：三浦隆宏、サブ進行役：会沢久仁子

まず、当日の会場の雰囲気と議論の内容について簡単に述べておこう。私が進行を担当した研修室Bは30名以上の参加者がいて、その人数の多さには正直、困惑せざるをえなかったが、ありがたいことに男/女の数はほぼ半々、年代も下は10代の方から、上は60代の方まで満遍なく参加されていたので、とりあえずは理想的な（街角で開かれる）哲学カフェの雰囲気をかもし出していたというてよいと思う。

だが、進行は失敗した。「三木清の言葉に『賢い人はますます賢くなるが、愚かな人はますます愚かになる』という言葉があります...」と、テーマと合致しにくい意見を述べる方や、「結局のところ中庸が大事なのであって...」と、経験を述べるだけでなく、ついつい自分の信念までをも述べてしまう方もいれば、私がこれまでに身を置いたことがない（障害者という）立場から、たいへん重みのある発言（「私としては、他人にはもっと踏み込んで関わってもらいたい」）をされる方もいて、私はこれらの方々の言葉を聴き取るのに精一杯で、その結果、進行役としての役割を果たすことができなかった。つまり、参加者から出された経験をもとに「問い」を定め、その問いに

対する「答え」を探るという形で議論を進めることができなかつたのである。なお、ここで注意しておかなければならないのは、「参加者がさまざまな意見を、さまざまな立場から述べる」ということは、ふつうに街角で開かれる哲学カフェにおいては至極当然のことなのであって、今回の失敗の原因は、明らかに進行役としての私の（発言者に対する）関わり方にあったということである。（この点に関しては後で述べる。）

結局、私は参加者を前にして、終始「おろおろ」しっぱなしの状態で、発言される方と発言されない方の差もはっきりしてしまい、この状況を参加者がどのように思っていたのかはアンケートの結果にもはっきりと現れていた。つまり、発言をされた方は議論の掘り下げがなされなかったことを残念がり、発言をされなかった方は、発言者が特定の（年配の）方に偏っていたことに強い不満を感じておられた。若い人々が年配の人々に向かって、気楽に自分の意見を言えるような雰囲気にできなかったのはひとえに進行役の責任であり、せつかくさまざまな人々が集まっていたという「利点」を活かすことができなかったことをたいへん残念に思う。参加者の皆さん、ごめんなさい。

ところで、私は今回はじめて、哲学カフェの進行をおこなったわけだが、進行を実際に体験してみて(そしてその進行が見事に失敗して)、身をもって学んだことがいくつもある。失敗は今後の取り組みに活かすことで、かろうじてプラスの意味をも持ちえてくると思うので、今回の失敗の原因について以下、記しておきたい。

失敗の最大の原因は、発言された方の意見を「この方はこのようにおっしゃいましたが、皆さんはどう思われますか」と他の参加者に「ふる」のではなく、私自身が発言者の意見に応答しようとしたり、それまでに与えられた意見との間に脈絡をつけようとしたことにあると思う。そのために、途中から私の頭が混乱し、收拾がつかなくなってしまった。(じっさい、私はあの場で二度ほど考え込んでしまっている。)

「聴く」ことには、相手の言葉を「受け止める」という側面と「受け流す」という側面の、二つの側面があるわけだが、今回私は、本来ならば後者で聴くべきところを前者で聴いてしまったがために、複数の、そして予想もつかない発言者の言葉の渦にまさに「呑み込まれてしまった」わけである。

進行役は、あくまでも議論の交通整理役であり、議論そのものに介入してはならない。ただし、その整理も本来は、参加者同士が議論の流れのなかで自然とおこなってゆくものであって、進行役

はそれを一歩引いた地点から「見守る」というのが理想なのだろう。そのためには進行役はある程度、「冷めて」いなければならない。

「冷めて」進行するためには、テーマも進行役にとって、あまり思い入れの強いものであってはならないだろう。(その点、今回のテーマは自分自身で決めたこともあって、私にとって少々思い入れが強すぎたように思う。) テーマが進行役にとって思い入れのある、馴染みのあるものであれば、たしかに発言者の意見を理解することはそれだけ容易にもなるが、もしその意見が自分がこれまで考えたこともないようなものであれば、容易に「たじろいでしまう」ことにもつながりやすい。

発言者の言葉との「距離」の取り方、議論の流れとの「距離」の取り方、そしてテーマとの「距離」の取り方。今回の経験は私にとって、図らずもこれらの「近さ/遠さ」のさじ加減を体験的に学ぶよい機会であった。この点に気をつけて再度、進行役に挑戦してみたい。

(みうらたかひろ)

テーマ：「一枚の絵から」

進行役：高橋綾、サブ進行役：本間直樹

研修室Aでは、「一枚の絵から」と題して、一枚の絵を見るという共通の経験をもとにしてダイアログを行った。(この芸術作品をテーマにしたダイアログは、子供のための哲学でも用いられており、またMOMAの講師であるアメリア・アレナスさんも「なぜこれがアートなの」という本のなかで、美術館で作品をただ鑑賞するだけでなく、その作品のまえで語り合うという、観客を巻き込んだギャラリートークの試みを紹介しており、今回はそれらを参考にこの企画を立てた。)

研修室Aの参加者は15人ほど、男性はちらほらで、20代～40代の女性が多かった。会場も研修室Bのほうよりは狭かったので、お互いの言葉や表情の動きが確認できるちょうどよいくらいの人数と広さだったと思う。

まずはじめに、今回は(最近よく見かける)奈良美智氏の「こども」の絵を用いることを発表し、絵を見て「感じた」ことをまず参加者それぞれが「言葉にし」、そしてそのお互いの言葉を交換し、どこが同じで、どのように異なっているのかを明らかにして言葉を「共有する」ことが重要である、とはじめに説明した。

まず絵を見てもらい、各人が絵を見て思い浮かんだこと、感想を一つの「キーワード」というかたちで出してもらった。印象を言葉にするということはなかなか難しいかと思われたが、たくさんの人が

絵に触発されているいろいろなキーワードを出した。

そして、そのキーワードを手がかりにして、お互いの言葉に着目し、どこが同じでどこが異なっているか、目の前にある一枚の絵に関して、どのような言葉が「共有」されうるのか、ということをお互いのなかから探っていこうとしたが、この段階はなかなか難しかった。

これは進行の下手際なのかもしれないが、参加者同士がお互いの言葉に注目して、意見を交わすということができにくかった。一枚の絵に対して自分が感じたことから出発する、という設定が難しかったのか、奈良氏の絵の「喚起力」のせいなのか、自分の過去の経験を絵の中に見る人(「この絵は子供の頃のわたしだ、と感じる」という人)や、絵のなかの子ども(人物)に「共感」と言う人、自分や絵の人物の「感情」について話そうとする人が多かった。絵が何かをじっと見上げている「こども」の絵だったこともあって、(自分の子供時代のころのこと、大人や両親との関係など)絵にたいしてパーソナルな経験を重ねて見るひともいた。

そのせいもあって、相手の言葉に関わるということ(他人の意見についてとやかくいうこと)が、相手の経験やその相手そのものを肯定したり否定したりすることになってしまうことになると感じた

参加者もいたのかもしれない。とにかく「言葉」のレベルで相手に関わるという場面をなかなか作りだせなかった。絵を見てなんでもいいから感じたことを語る、ということが逆に参加者を不安にさせたのかもしれない。自分の経験を吐露するのも理論武装するのもなく、絵に「ずっと」入っていき、言葉を見つけることは、いきなり言われてもなかなか難しい。しかも相手の出した意見と自分の出した意見に言葉のレベルで関わりを見出すこと、その意味で「言葉を共有すること」は、議論の経験がない人には、いきなりは理解しがたい、演じがたいものだったのだろう。

議論の中程では、それまでに、いろいろな言葉が出たが、皆がそれを遠巻きに見守っている、という感じでどこか硬い雰囲気が残ったままだったような気がする。

いろいろ話を聞いているうちに、はじめに説明した「言葉を共有する」ということの意味がうまく伝わっていないということがわかった。言葉を「共有する」ということを、相手の意見に「共感」しなければならぬ、対話を一つのゴールに持っていかなければならない、ということだと受け取った参加者が何人かおり、「いろいろな意見があることはわかったが、自分の感じたことは変わらない」という人や、「色々な意見をひとつにまとめるのは強引だ」と進行に違和感を表明する参加者が現れた。そこで今回の目的は「共感」を無理してつくり出すのではなく、たがいの言葉に注目し、その言葉同士がどの点で同じで、どの点で異なっているかを議論すること、言葉を

「共有」することだ、と述べた。その時点でもう時間がなくなっていたので、せめてということで、テーマの絵に対する感想をもう一度、言葉にまとめてもらおうとしたが、これもなかなかうまくいかなかった。

私達の研究室では、この芸術作品にもとづくダイアログをこれからさらに試してみようとしており、また私自身は、来年度から始まる高校生を対象にした哲学の授業のなかにも取り入れてみたいと考えている。「感じたこと」からはじめるダイアログが実現するには、もっとたくさんの方の進行の工夫が必要であることがわかったが、うまくいけば、専門家の「芸術批評」でも、分かる者同士の内輪話でもない、対話による(街角?!)「芸術批評」のようなものができるのではないかと考えている。

今回の「哲学カフェ」は、「哲学」という言葉に対する身構えがそうさせるのか)若干「硬い」雰囲気が残ってしまったが、そのことには、議論を進行する私達の態度や場所の雰囲気、ということも関係があるのだろう。「言葉を共有する」ための工夫はもちろん、「ガッコウ」モードではない)気軽に語れる雰囲気のところで開催する必要があるのかもしれない。

次回はぜひ、街なかのカフェで。

(たかはしあや)

『メチエ』ももう9号になりました。

このところ対話関係の特集が続きますが、そのおかげで哲学プラクティスやソクラティック・ダイアログについてはようやく立体的に見ることができるようになったと思います。2002年夏にはイギリス・オックスフォードで開催されるソクラティック・ダイアログの国際会議にて、臨床哲学関係者から中岡・寺田・堀江・本間の4名が日本でのダイアログの取り組みについて発表を行うことになりました。

本文でも触れましたが、「コーチング」はとても面白いものです。現在「対話技法論」という授業を設け、ソクラティック・ダイアログや哲学カフェの進行役の訓練を行っています。今後「コーチング」を本格的に導

トワークがとても重要だと感じます。(会沢) ドイツとオーストリアから二人の「ソクラテス者」を招いて、講演やシンポジウム、SD、DTを開催した。こんな機会はめったにない。この経験で、これまでヨーロッパ(英語・ドイツ語)と日本(日本語)で別々に参加したり進行役を行ってきたSDのイメージや理論的な意味が、少し立体的に見えてきたように感じた。参加した人たちも、なんとなく「本場」の感覚を味わったのではないだろうか。

対話の面白さ(また、つまらなさ、難しさ)の本領は、まずはそこに居合わせてみなければ分からない。オックスフォードで初めてSDに参加したとき、三日間、慣れない英語で必死に考えをまとめ、聴き、発言するこ

臨床哲学の余白

入ることによって、対話の技法をより洗練できると確信しています。また、それと平行して芸術作品や映画を使ったダイアログなども実験的に行う計画をしています。こうした取り組みを続けることによって数年後にはこの研究室から立派な進行役たちがはばたち、各地で活躍することを期待しています。

(本間)

国際会議やSD週間に参加して、英語が十分話せないしんどさも味わいましたが、日本や日本で哲学をすることを意識するよい機会になりました。

そのうち哲学プラクティス国際会議を日本で開催することになるのでは。そのためには、もちろん英語は必要ですが、国内のネッ

とに集中した。そこで、まるで自分がヴィトゲンシュタインにでもなったかのように「考えた」という充実感を味わうことができた(この時のテーマが「理解と誤解」であったことにもよる)。この効果を、しかしどのようにして創り出すことができるのか。またSDを行うことで、どのような別の効果が生まれているのか。これもまた、自分でSDを続けながら探っていくしかない。対話は終わらない。(堀江)

大学の外にはたしかに哲学研究者はいません。しかし、長い「人生」をおのおの懸命に生き抜いてきた人々の言葉には、時として名高い哲学者の書き物にも匹敵するぐらいの迫力を感じるときがあります。(三浦)

臨床哲学のメチエ Vol.9 2001 秋冬号

総編集：本間直樹

編集：会沢久仁子+堀江剛+三浦隆宏+高橋綾

協力：Power Mac G3&4

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

560-0043 大阪府豊中市待兼山1-5

clph@let.osaka-u.ac.jp

<http://bun70.let.osaka-u.ac.jp/>

